

Eec. 1980

甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 52

日本産テントウムシダマシ科概説 (4)

佐々治寛之

Genus *Ancylopus* COSTA, 1854 ヨツボシテントウムシ属

南ヨーロッパ, アフリカ, ニューギニア, 南アジアから日本に至って分布し, 変異に富むため多くの名がつけられたが, *A. melanocephalus* (OLIVIER 1808) 1種にまとめられた。ところが最近になって STROHECKER と DAJOZ が独立に新たな見解を発表した。概要を示すと次のとおりである。

DAJOZ (1973) はインド・日本から *villieri*, ボルネオから *neglectus* なる新種を記載。STROHECKER (1972) はヨーロッパ, アジアの材料を再検討し, 5種6亜種に分けた。それに従うと日本のは *pictus asiaticus* STROHECKER, 1972に所属することになる。ここで問題となるのは発行日付である。DAJOZの方は Bull. Mus. natn. Hist. nat., Paris, 3^e sér., no. 85 に登載され, "Sept.-Oct. 1972" と日付されているが, 実は末尾に "Achévé d'imprimer le 30 mai 1973" と明記されているのである。一方, STROHECKER の論文は Pacific Insects, Vol. 14, no. 4 に出ており, "20. December 1972" の日付が見られる。表面に示された日付から筆者は(佐々治, 1978) *villieri* が有効と思ったが, 上記のように印刷面だけを信頼する限り, STROHECKER の方に先取権が認められることになる。両者とも雄の中脛節と交尾器の形状を上翅斑紋と組合せて区別している。なお, STROHECKER はもう1つの種にも, 日本の標本を含めているので, ラベルの間違いかもしれぬが一応信頼してここに含めておこう。

日本産種への検索表

1(2) 上翅は赤褐色地に基部, 会合部(翅端部を除く)が狭く黒色で, さらに側方と翅端前に長円形の

黒紋がある *pictus asiaticus* STROHECKER
2(1) 上翅は黒色で, それぞれに2個の大形赤色紋があり, これはしばしば細い淡色条で連らなることがある *phungi phungi* PIC
30. *Ancylopus pictus asiaticus* STROHECKER 1972. ヨツボシテントウムシ (第14図)

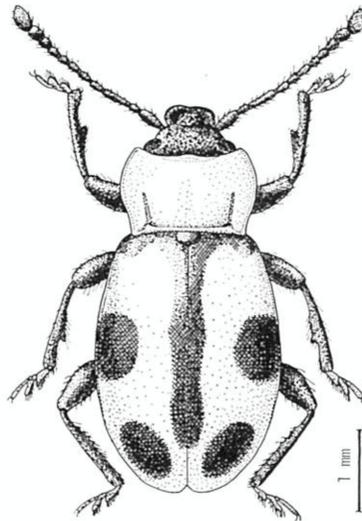
日本のものだけを見るかぎり, 斑紋は割合安定している。雄の前脛節は内側中央に顕著な歯突起があり, 中脛節は中央より少し先の方に顕著な歯突起があり, その基方に微歯列がある。後脛節は基方に小歯が並ぶ。雌の前背板は側溝の延長が中央で逆T字形の溝を形成する。体長 4.5~5.0mm。本州, 四国, 九州, 対馬, 南西諸島, 台湾, 中国に分布し, 模式産地は中国の福建省。種 *pictus* (WIEDE-MANN, 1823) は6亜種に分けられ, インドからスンダ列島, ボルネオ, セレベス, ニューギニア, 中国, 日本等に分布する。

31. *Ancylopus phungi phungi* PIC, 1926. ベニヨツボシテントウムシ(新称)

この種に該当する標本を見ていないが, STROHECKER (1972)によれば, 斑紋のほか, 次の点で前種と異なる。上翅は同属他種よりも短い; 雄の中脛節は中央に歯突起があり, 後脛節は先端に向って太くなるが鋸状にならない, 雄交尾器の側突起が細長い。体長 4~5mm。模式産地はトンキンで, 中国, チベット, 日本に分布し, 日本の標本は富士国立公園河口湖産となっている。思い当たる標本をお持ちの方があれば拝見させて欲しい。

Genus *Mycetina* MULSANT, 1846 ムナビロテントウムシ属

検索表にあげた特徴のほか, 名のように前背板が



第14図 *Ancylopus pictus asiaticus* STROHECKER ヨツボシテントウムシ, ♂

広いものが多く、いずれも背面は強い光沢がある。日本産の *rufipennis* を模式種として *Phaeomychus* GORHAM, 1887 が区別され、これは、前背板があまり広くなく、前脛節が雌雄で異なるなどの点で狭義の *Mycetina* と異なるが、あえて分ける必要はなさそうである。世界から58種が知られ、そのうちの大多数である45種がアジア産、あとヨーロッパに2種、アフリカに8種、北米に3種で、特に東南アジアに分布の中心がある。日本に4種産する。

日本産種への検索表

- 1(4) 上翅は一樣に赤褐～暗褐で斑紋を持たない。時に著しく暗化することがあるが、その場合でも真黒にはならない。稀に不明瞭な斑紋を形成することがあるが、その場合は前背板側縁が強く弧状に拡がる。
- 2(3) 前背板の幅は長さの2倍に達せず、上翅の肩部よりも明らかに狭く、基部で最も広く、その側縁は基半において、ほぼ平行。体長3.0～5.0mm
.....*rufipennis* MOTSCHULSKY
- 3(2) 前背板の幅は長さの2倍以上で、上翅の最大幅よりもわずかに狭く、側縁は強く弧状で中央部で最も広い。体長 3.5～4.0mm
.....*laticollis* GORHAM
- 4(1) 上翅は黒色地に赤褐又は黄色紋があるか、赤褐色に黒色紋がある。もし無紋の場合は、その地色は真黒であるか、又は前背板は上翅肩部よりもわずかに狭く側縁は基半においてほぼ平行。
- 5(6) 上翅は黒色地に2対の黄色帯紋があるのを基本とするが、後方の紋はしばしば消失する。稀に前方の紋も消失し無紋となることがある。いずれの場合も前方の紋は肩部に達しない。大形で4.0～5.0mm.....*amabilis* GORHAM
- 6(5) 上翅は赤褐色地に黒紋があり、小楯板周囲と後半大部分が黒い。通常両者は会合部に沿って結合し、イカリ状紋となる。変異が著しく、黒化が進んだ個体では肩部が淡色に残されて大部分が黒くなる。また、淡色化した個体では赤褐色地に不明瞭な暗色紋を示すだけとなり *laticollis* に似てくるが、前背板の側縁はほぼ平行なことで区別される。小形で2.4～3.4mm.....
.....*ancoriger* GORHAM

32. *Mycetina amabilis* GORHAM, 1873

キボシテントウダマン (第15-A図)

光沢の強い真黒な上翅に、基部近くと後方に波形黄帯紋があるが、原記載時にすでに示されたように後方紋は消失することがある。中根(1958)はそのような型に *f. bumeropicta* と命名し、さらに全く無紋のものを *f. takahashii* と名付けた。中根が指摘したように、九州産のものでは黄紋が縮小する傾向が一般に見られ、中根は本州産のものと雄交尾器を比較して差異があることを報告している。また、本州産の個体は前背板がより広い傾向があり、区別できるかもしれないが、今後の課題としたい。模式産地は長崎で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

33. *Mycetina laticollis* GORHAM, 1887

ムナビロテントウダマン (第15-B図)

前背板が幅広く、長さの2倍以上あり、側縁が弧状で前後に狭まることで、本邦産の他種と容易に区別できる。上翅は一般に一樣に赤褐色であるが、中には後方が暗色となる個体もある。本州、四国、九州、対馬に分布する。

34. *Mycetina ancoriger* GORHAM, 1873

イカリモンテントウダマン (第15-C図)

種名および和名が示すように上翅にイカリ形の黒紋がある美しい種であるが、その色彩は変異に富み、代表的なものを図示しておいた。黒色部の発達していないものでは、*laticollis* や *rufipennis* とまぎらわしくなるが、前背板の形に注目すれば見誤ることはない。本州、四国、九州に分布し、堆肥や古くなった高屋根に多く見られる。

35. *Mycetina rufipennis* (MOTSCHULSKY, 1860)

ベニパネテントウダマン (第15-H図)

GORHAM (1887)はこの種を模式種として *Phaeomychus* 属を作ったが、その際に *Endomychus* と比較して発音器をもつことを区別点の一つとしてあげ、*Mycetina* との差については何も言及しておらず、STROHECKER (1951, 53) は *Mycetina* に含めることを主張している。中条(1938, 39)は *Phaeomychus* を独立属として認め、中根(1963)もそれに従っているが、中根は後に(1977) *Mycetina* に修正している。一方、上翅が暗色で点刻の強い個体群(高野山産)が亜種 *koyana* NAKANE, 1958 として区別されており、このようなものは福井県大野市下打波でも採集されている。後者の産地から数kmしか離れていない小池地区のものは通常の明るい型であり、亜種とすることは問題があり、もし、差異が明確になれば、むしろ独立種とした方がよいかもれない。北海道、本州、四国、九州に広く分布するが、*koyana* 型の分布がどのようにになっているか詳しい報告がない。

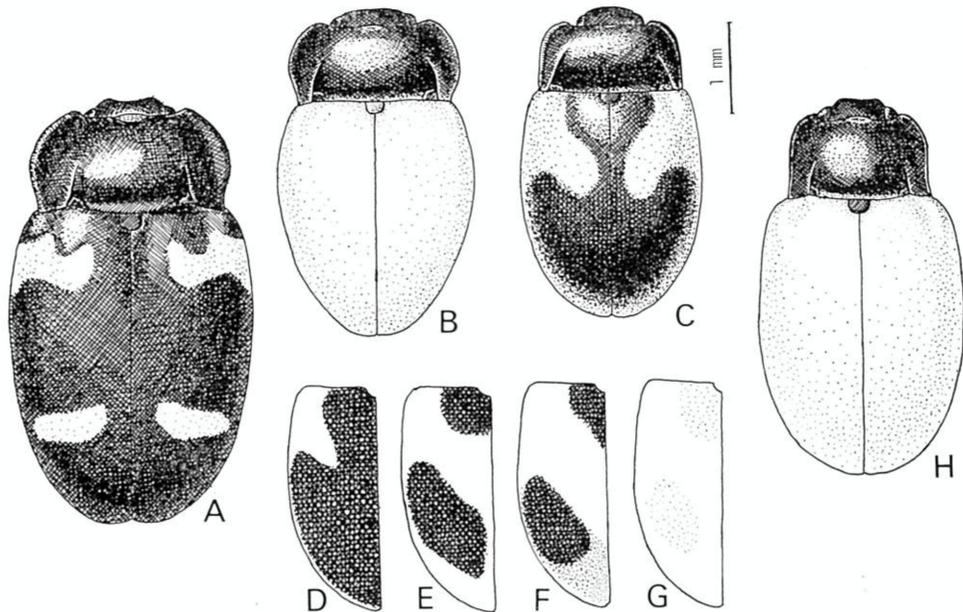
Genus *Eumorphus* WEBER, 1801 オオテントウダマン属

大顎の内縁に歯を持たないことでまとめられる一群で、体は大きく、ごく一部の例外を除き、上翅に2対の黄色紋を持つ。典型的なインド・マレー分布要素で日本の対馬まで分布を延ばしている。1953年の時点で53種が記載されていたが、STROHECKER (1968)はほとんどすべての既知種のタイプ標本を調べた上で7新種10新亜種を加え、53種20亜種に整理した。日本からは次の1種だけを産する。

36. *Eumorphus quadriguttatus pulchripes* GERSTAECKER, 1858

タイワンオオテントウダマン (原色昆虫大図鑑, 107-10)

体長10～12mmで本邦産種中最大。前背板は黒色、上翅は紫藍色光沢をもつ黒色で、4黄点があり、腿節先半は深紅色の美麗種。日本では対馬だけに産するが、倒木、朽木上に普通に見かける。分布はセイロン、インド東北部、中国南部、台湾、対馬。原名亜種



第15図 A: *Mycetina amabilis* GORHAM キボンテントウダマシ ; B: *M. laticollis* GORHAM ムナビロテントウダマシ ; C~G: *M. ancoriger*. GORHAM イカリモンテントウダマシ (D~G は上翅色彩変異) ; H: *M. rufipennis* MOTSCHULSKY ベニバネテントウダマシ (いずれも同拡大率)

quadriguttatus (ILLIGER, 1800)はインドシナ半島, インド, スンダ列島, ボルネオ, 南パラワンに生息し, 亜種 *convexicollis* GERSTAECKER, 1857 がフィリッピン, 北パラワンに, 亜種 *andamanensis* GORHAM, 1857 がアンダマン諸島に分布する。雌は翅端が丸く, 雄では尖る。九州, 南西諸島には全く発見されず, 対馬に分布が飛ぶのは大変興味深いことである。

Subfamily ENDOMYCHINAE

テントウダマシ亜科

背面に被毛を持たない, 前背板前縁に発音膜がない, 小顎内葉は外葉と密着し柔毛が少ない, 下唇中舌は長方形で側方に拡がらない, 前基節は広く隔てられるなどの点でまとめられ, この群では性徴をもたないのも特徴である。STROHECKER (1953) は *Endomychus*, *Bolbomorphus*, *Meilichius*, *Cyclo toma*, *Eucteanus* の5属をここに含めたが, そのうち最初の2属が日本におり, 台湾まで行くと全属が産する。

日本産属の検索表

- 1(2) 前胸腹板突起は中胸腹板突起よりも幅せまく, 縦長。前背板横溝は明瞭。上翅は中位に膨らむ…………… *Endomychus*
- 2(1) 前胸腹板突起は極めて幅広く, 中胸腹板突起と同幅で, 長さよりも広い。前背板横溝を欠く。上翅中央部は高く膨らむ…………… *Bolbomorphus*

Genus *Endomychus* PANZER, 1795 テントウダマシ属

科の模式属で, ヨーロッパ産の *E. coccinea* (Linnaeus, 1758)を模式種とし, ヨーロッパ, アジア, 北米から合計26種が記載されており, そのうち21種がアジア産である。

GORHAM (1874) は *gohrami* を模式種として新属 *Cyanauges* を作り, これはホモニムであるため *Caenomychus* LEWIS, 1893 と改められた。小顎ひげの形状で分けたものであるが各種の中間段階のものがあって現在では分けることはしない。

日本産種への検索表

- 1(6) 小顎ひげ末端節は縦長で, 先端は斜に切断され, その切断辺は外辺より短い(第16-D図)。
- 2(3) 上翅は黒色で橙黄色の大紋が肩から翅端前に向って走る…………… *plagiatus* GORHAM
- 3(2) 上翅は黒色又は青色光沢のある黒色で黄紋を欠く。
- 4(5) 前胸腹板突起はほぼ正方形で, その先端は平らに切断される(第16-B図)。背面は全体黒色…………… *hiranoi* SASAJI
- 5(4) 前胸腹板突起は長さよりも明らかに幅狭く, 先端はやや丸くなる(第16-A図)。本州産のものでは上翅は藍-紫色光沢をもち, 九州産のものでは青紫光沢を欠く…………… *gorhami* LEWIS
- 6(1) 小顎ひげ末端節は横長で, 先方に向って強

く拡張し、末端辺は側辺よりも長い (第16-E図)。
7(8) 上翅は肩部と後方に2対の淡色紋をもち、
前方の紋は大きく肩部をおおう。小楯板は後端が
角ばり三角形で、幅よりも長い。同長……………

…………… *quadra* GORHAM

8(7) 上翅は黒褐～黒色で、無紋か、1対又は2
対の淡色紋がある。2対の紋がある場合、その前
方の紋は小さく肩部に達しない。小楯板は幅が長
さよりも広い。同幅で、後端は丸く半円形

…………… *nigropiceus* GORHAM

37. *Endomychus gorhami* (LEWIS, 1874)

ルリテントウダマシ (原色昆虫大図鑑, 107-23)

邦産テントウダマシ類中最も普通で、上翅は藍紫
色の光沢をもつ (原名亜種)。九州産ではこの光沢
がなく、点刻がこまかく不規則になり、亜種 *kyushu-*
ensis SASAJI, 1978 として区別される。原名亜種
は北海道、本州、四国に分布する。対馬からの記録
があるが、標本を見ていないのでどちらの亜種に所
属するか判らない。 *Caenomychus violaceipennis*
MADER, 1941 (箱根産) は原名亜種のシノニムで
ある。

38. *Endomychus hiranoi* SASAJI, 1978

ヒラノクロテントウダマシ (新称)

前種に似るが背面は全く黒色。検索表のように前
胸腹板の形が異なり、前背板は大きく両側は平行に
近く、その点刻は細かいが明確に印される。既知産
地は箱根と軽井沢。体長4.2~4.7mm。種名は平野
幸彦氏に奉献されたものである。

39. *Endomychus plagiatus* (GORHAM, 1887)

キスジテントウダマシ (第17-A, B図, 原色昆虫

大図鑑, 107-20)

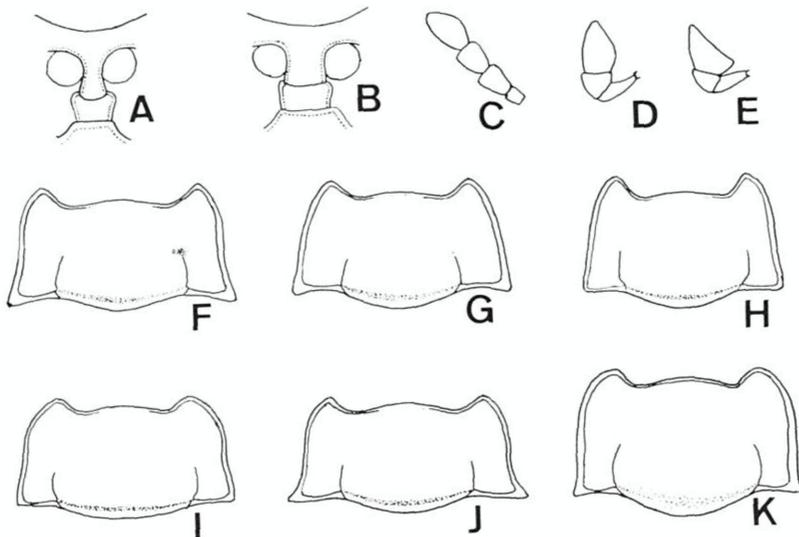
上翅の肩部から翅端近くにかけて顕著な橙黄色の
紋があるが、稀に途中でとぎれる個体もある。中・
南九州各地と四国剣山から記録されている。体長
3.8~5.0mm。次種の中に本種とそっくりの色彩を
示すものが知られるようになったので、注意を要す
る。次種とは小顎ひげ末端節の形のほか、上翅の点
刻が粗大であることで識別できる。なお、神谷(1959)
が福岡県彦山から記録した個体は次種の誤りである。

40. *Endomychus nigropiceus* (GORHAM, 1887)

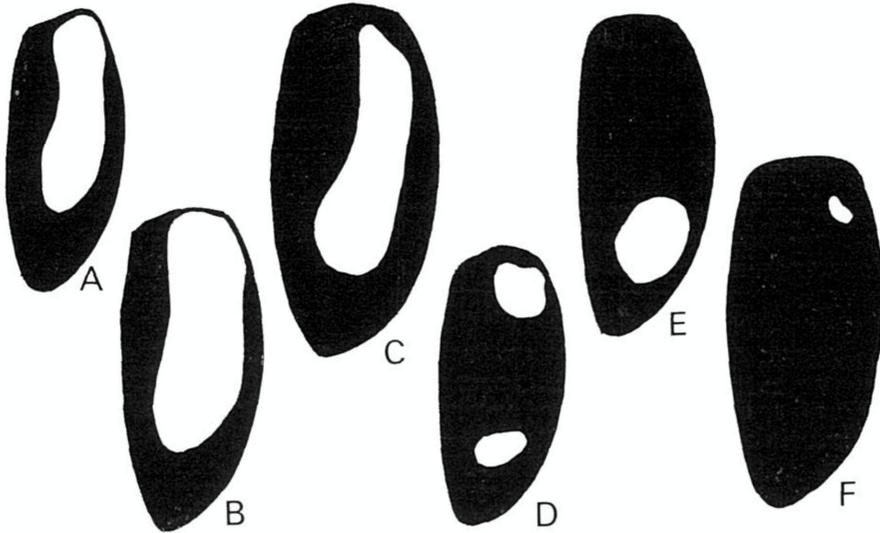
ウスグロテントウダマシ (第17-D-F図, 原色昆虫大図鑑, 107-21)

原記載に示された個体は無紋のものであるため、
ルリテントウダマシによく似ているが、ルリ色の光
沢を欠き太短いものとして区別された。しかし、翅
端前に赤紋を有するもの、翅端前と肩部後方に4紋
を有するもの、前種と同様に黄色大条帯をもつもの
などがいずれも本種の色彩変異として存在する。

最初、独立種として記載された *ohbayashii* NAKANE, 1951, その亜種として記載された *shirahatai* NAKANE, 1951 はそれぞれ翅端2紋型と黄条型に相当する。中根氏はそれらを1958年にformに格下げしたが、1963年(大図鑑)ではそれぞれ岐阜県と東北地方の地方亜種に再び昇格させている。しかし、手許の標本をみると黄条型が福岡県彦山、高知県手箱山、4紋型が福井県嵐、翅端2紋型が福井県嵐、肩部2紋型が栃木県中禅寺、無紋型が木曾御岳、箱根、鳥取県大山、栃木県中禅寺と各地に分散して産するので亜種として取扱うのは望ましくない。また連続する傾向があるので遺伝的多型 morph とする



第16図 A, F-J: *Endomychus gorhami* LEWIS ルリテントウダマシ(I, J は九州亜種); B-B-D, K: *E. hiranoi* SASAJI ヒラノクロテントウダマシ; E: *E. nigropiceus* GORHAM ウスグロテントウダマシ。A, B, 前・中胸腹板中央部; C, 触角先端節; D, E, 小顎ひげ; F-K, 前背板。



第17図 A~B: *Endomychus plagiatus* GORHAM キスジテントウダマシ;
C: *E. quadra* GORHAM ハバビロテントウダマシ; D~F: *E. nigropiceus* GORHAM ウスグロテントウダマシ, 右上翅色彩を示す。

ことすら疑問がある。体形や触角の形状にも若干変異があり、もっと多くの標本を集めて精査すれば面白い結果が出るかもしれない。体長 3.8~4.7mm。本州、四国、九州に分布。

41. *Endomychus quadra* (GORHAM, 1887)

ハバビロテントウダマシ(原色昆虫大図鑑, 107-22) (第17-C図)

上翅に大形の淡色紋を2対もち、前種の4紋形と似るが、肩部の紋はずっと大きい。原記載によれば、触角第3節が第4・5節の和に等長というが、手持ちの標本ではそれよりもかなり短い。前種 *nigropiceus* と比較すると極めてよく似ており、差異を見出すことがむずかしいが、小楯板の形や上翅と前背板の点刻がやや異なり、上翅は後半で半円形に太まる。上翅の肩部は前背板基部よりもほとんど広くないが、これも原記載に付された図と異なるので、問題が残る。中根猛彦博士の御好意で御在所山産(20. vi. 1943, 大沢省三採集)の2頭を検すること

が出来た。なお、以前に御譲渡にあずかった三重県湯の山産(20. vi. 1943, 穂積俊文採集)の1頭は前種の個体変異とっていたが、本種と思われる。
Genus *Bolbomorphus* GORHAM, 1887 セダカテントウダマシ属

次に示す日本の種を monotype として作られた属で、その後8種が追加されているが、いずれも中国・台湾・日本に限られている。*Eucteanus* ならびに *Meilichius* 両属と近縁で、それらとの関係は今後の課題である。日本からは1種だけが知られる。

42. *Bolbomorphus gbbosus* GORHAM, 1887

セダカテントウダマシ(原色昆虫大図鑑, 107-19)

体長7.0~9.0mmで、日本産テントウダマシ類中、台湾オオテントウダマシに次いで大きく、上翅は中央部が著しく膨れ、黒褐色に肩部と中央後に対する淡黄色紋のある顕著な種である。分布は本州紀伊半島山地だけに限られている。(福井大学)



○ムネアカウスバコメツキの分布

ムネアカウスバコメツキ *Athous (Athous) rufithorax* Miwa, 1930 は Taihorin (7. vi. 1911, H.SAUTER 採集)と Horisha(1926, 三輪勇四郎採集)で採集された標本(共に個体数不明)に基づいて三輪博士によって記載された種類である。しかし、その後の採集例がなく、三輪(1934)が原記載の

データを引用して全形図を原色で紹介しているだけである。筆者は幸いにも台湾の中部で採集された本種の下記標本を見出したので記録しておく。

1頭, 南投県南山溪, 23. v. 1976, 久保田正秀採集; 1頭, 同, 9. v. 1977, 筆者採集; 2頭, 南投県廬山温泉付近, 29. vii. 1978, 柴田泰利採集; 2頭, 同, 30. vii. 1979, 柴田泰利採集。

末筆ながら、日頃から快く資料を提供して下さる柴田泰利、久保田正秀両氏に深く感謝する。

(東京農大, 鈴木 互)

○トカラツヤヒラタゴミムシ沖繩本島からの記録

トカラツヤヒラタゴミムシ *Synuchus tokaranum* LINDROTH はトカラ列島の宝島および中之島を模式産地として記載され、後に奄美大島 (HABU, 1978) から記録された。筆者の1人境野は沖繩本島北部で採集したので報告する。

1頭, 国頭村辺土名, 3. xi. 1978.

なお, 本種はブラックライトにきたものである。

(東京農大, 松本俊信・境野広行)

○花にきたハイロハナカミキリ

最近, 神田英治氏* はハイロハナカミキリ属 *Rhagium* 数種の消食管の中から花粉や孢子, 樹液などを検出した興味ある報告をされた。私は1966年7月31日, 奥日光の金精峠から湯元へ下る途中, 林床のナルコユリ属と思われる植物の葯を食害中のハイロハナカミキリ *Rhagium japonicum* BATES を観察したので報告する。当時大変奇異に思い, また, この属の分類上の位置から興味深く思ったが, 実際に花に集まる記録がないことを知らなかったのでその仮にしておいた。当時の野帳をさがしたが見当たらないので, 標本と記憶に頼るしかないが, 体を花被に突っこんでいて, 引っぱり出すと葯が何本も損傷をうけていた。この植物には別に数頭のカラカネハナカミキリも来ていた。時刻については, あまりはっきりした記憶がないが, 下山途中のことで, あまり早くなく, 多分午後ではなかったかと思われる。

* 神田英治: ハイロハナカミキリ属成虫の後腸内容について, *New Entomologist*, 29 (3), pp. 1~6, 1980. (東京都多摩市, 三宅義一)

○タナカツヤハネゴミムシの記録

最近, 静岡県磐田市へコガネムシ科の夜間採集に行かれた石田正明氏から, 同時に採集された若干のゴミムシ類を頂いたが, 中に1頭のタナカツヤハネゴミムシ *Anisodactylus andrewesi* (SCHAUBERGER) があった。東南アジアから知られていた本種が, 我国では茨城県取手の利根川河川敷から多数が記録 (TANAKA, 1958) されて以来, 関東平野の利根川中流域に最も採集例が多いようで, 他に近畿, 中国, 九州から僅かな記録が知られているだけなので, 東海地方の新産地として報告しておく。

1♂, 静岡県磐田市鮫島, 2. vi. 1980. 石田正明採集。

標本を恵与くださった石田正明氏に厚くお礼申し上げます。(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

○北海道日高におけるシロウズベニコメツキの記録

シロウズベニコメツキ *Denticollis shirozui* は, 大雪山で採集された1雄に基づいて大平仁夫博士によって1963年に記載された種類であるが, 少ない種らしく, その後の記録はあまりないようである。最近筆者は, 国立科学博物館所蔵のコメツキムシの中から従来記録のなかった日高産の本種を見出すことができたので, ここに報告しておきたい。

3♂♂, 北海道日高山脈幌尻岳, 27. vii. 1971. 青木淳一採集。

本種は体長が9mm前後と小型で, 触角は雌雄共に鋸歯状(雄でもくしひげ状にならない)翅鞘は全体が暗褐色を呈するので, 日本の他の *Denticollis* 属の種類とは容易に区別することが出来る。

末筆ながら, 国立科学博物館所蔵の標本を検査する機会を与えて下さった黒沢良彦博士にお礼申し上げます。(東京農大, 鈴木 互)

○ジュウジヒメミツギリゾウムシの記録

ジュウジヒメミツギリゾウムシ *Miolispa cruciata* SENNA, 1898 は森本(1979, 甲虫ニュース, (47), p.2)によると, 日本では屋久島とトカラ諸島中之島が産地として挙げられており, その後, 田尾(1980, 月刊むし, (112), p.36)が石垣島から報告している。

筆者はトカラ諸島口之島産の本種を1頭所有しているので報告する。

1頭, トカラ諸島口之島, 26. viii. 1976, 伊藤主計採集。(和歌山県有田郡湯浅町, 的場 績)

○ススキの歩行虫二種

八重山諸島でススキを叩いて得た歩行虫二種を報告しておく。いづれも分布は当然予想されていたが記録の少ないものである。

1. *Chlaenius chuji* JEDLICKA チュウジョウアオゴミムシ

与那国島宇良部岳, 1♂, 2♀♀, 11~13. iv. 1980; 石垣島於茂登, 1♂, 26. iv. 1980.

台北原産で, 我国では屋久島から記録(佐藤, 1972)されたこの優美なアオゴミムシが草木上に見られ, 叩き網で得られるらしいことは既に黒沢(1975)が報じている。ススキとは思いもよらなかったが, それにも増してネットに落ちてからの駿足を極めた遁走ぶりは, 炎天下の単調なビーティングに飽き始めた採集者を驚かすに充分であった。

2. *Hexagonia sauteri* DUPUIS チャイロヒラナガゴミムシ

与那国島宇良部岳, 1♀, 13. iv. 1980.

台湾の“Kankau”原産, 最近, 西表島から記録(HABU, 1973)された。*Hexagonia* 属は灯火に来る他, ススキ, アシ, 砂糖藜等にいることが知られており, その扁平な姿態はいかにもススキの葉鞘等に潜むにふさわしい。

なお, 上記2種と時を同じくして, ススキ葉上に歩行虫の幼虫をかなり見ており, 2頭を採集した。体長11mm前後。頭部, 中後胸は赤橙色。前胸, 腹部, 脚が黒色の色彩顕著なもので, 幾つかの特徴からアオゴミムシ類の2, 3令幼虫と思われ, 石垣島於茂登ではススキ葉上に附着しているゼリー状卵塊様のものを摂食中の1頭を目撃している。アオゴミムシ類幼虫には葉上にのぼり捕食するものがあるので, これがチュウジョウアオゴミムシの幼虫かどうかは勿論わからないが, 両者はしばしば同じ所で見かけるものなので参考までに附記しておく。

(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

樺太のヒゲナガゾウムシ

妹尾俊男

樺太に分布するヒゲナガゾウムシ科 (Anthribidae) に関しては、玉貫 (1933) によって小沼から採集された *Platystomus albinus* LINNÉ シリジロヒゲナガゾウムシが記録され、その際に他に種名の確定していない属種も付記されたのが嚆矢と思われる。筆者は、国立科学博物館の黒沢良彦博士の御好意により、同館所蔵のヒゲナガゾウムシ類を検査する機会に恵まれ、それらを整理した結果、3属4種の樺太産のヒゲナガゾウムシを見出すことが出来た。なお、これらの標本の全ては故河野広通博士の蒐集品である。

報告に先立ち、貴重な標本を検討する機会を与えて下さると共に種々の御教示を賜った黒沢良彦博士、ならびに常日頃から御指導を賜わっている東京農大の渡辺泰明助教授、標本写真の撮影を快諾して下さいた鈴木 互氏に対して深謝する。

1) *Platystomus albinus* (LINNÉ, 1758) シリジロヒゲナガゾウムシ

1頭, 小沼, 27. vii. 1933, 河野広道採集。

Platystomus 属は SCHNEIDER によって創設された属で、type-species は LINNÉ (1758) が記載した *Curculio albinus* (本種) である。本種はヨーロッパ、西シベリアに比較的普通に分布する種であるが、前胸背板前縁の白色のT字形紋や翅鞘中央直前に存在する白色横細紋に種内変異が認められ、数個体群の変種が記録されている。カシ、ブナ、ヤナギ、カバ、ハンノキ等で採集された報告があるが、本邦には分布していない。

分布：ヨーロッパ、西シベリア、樺太。

2) *Gonotropis insignis* MORIMOTO, 1980

1頭, 知取 (Makarov), 17. vii. 1932, 吉倉 真採集。

Gonotropis 属は、LECONTE (1876) が *G. gibbosus* を基にして、モノタイプで創設した属である。しかしながら、アメリカの VALENTINE (1960) は、

北部メキシコ産のヒゲナガゾウムシ科をまとめる際に本属の設置を認めず、*Tropideres* 属のシノニムとして取り扱った。また1979年 ODAは、1) appendages が非常に短い、2) 複眼は小さく互いに離れ、口吻はくびれる、3) 前胸背隆線は中央で強く角ばる等の形質を重視し、*Gonotropis* 属を復活させた。本種は入江平吉氏が北海道のニベソツ山で採集された個体に基づいて MORIMOTO (1980) によって記載された種であり、副模式標本の中には江崎悌三博士によって Ochiho (樺太) から採集された1個体も含まれている。

分布：日本 (北海道)；樺太。

3) *Gonotropis crassicornis* (SHARP, 1891) シロモンヒゲナガゾウムシ

1頭, Horo, 10. viii. 1937, 玉貫光一採集；1頭, Manui, 1. viii. 1942, Y. Nishijima 採集。

本種は SHARP (1891) によって、北海道から採集された個体に基づいて *Tropideres crassicornis* として記載された種であるが、ODA (1979) により *Gonotropis* 属へ移された。樺太からは未記録と思われる。

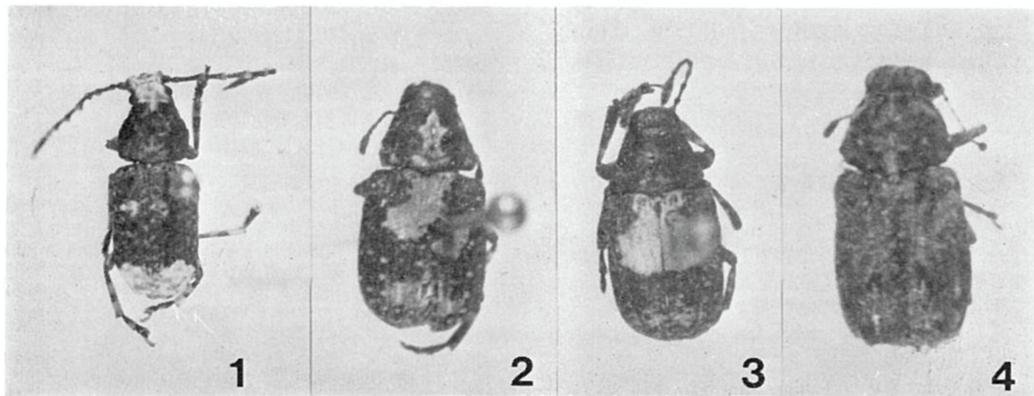
分布：日本 (北海道, 本州)；樺太。

4) *Dissoleucas nodulosus* (SHARP, 1891) ヒメヒゲナガゾウムシ

1頭, 多蘭泊, 27. vii. 1924, 渡辺千尚採集。

本種も *Tropideres* 属の一員として SHARP (1891) によって記載された種であるが、WOLFRUM (1953) が, Junk の *Coleopterorum Catalogus* の Supplementa を編集する際に *Dissoleucas* 属に含めた。国外ではウラジオストクからの記録があるが、樺太からは未記録と思われる。本種は桑樹の害虫として古くから知られており、また苹樹や榆の害虫としての報告もある。

分布：日本 (北海道, 本州, 九州)；ウラジオストク, 樺太。



(東京農大)

○宮城県の甲虫数種の記録

宮城県内で筆者が採集した甲虫類のうち、宮城県末記録種または記録されていても珍しいと思われる種類を数種選び以下に記録する。

1. ムツコブスジコガネ *Trox mutsuensis* NOMURA

1頭, 宮城郡宮城町苦地, 9. vii. 1978; 1頭, 同, 2. viii. 1979.

2. コバナツコブスジコガネ *Trox nohirai* NAKANE

1頭, 宮城郡宮城町苦地, 9. vii. 1978.

3. マメダルマコガネ *Panelus parvulus* WATERHOUSE. 1頭, 宮城郡宮城町奥新川, 25. vi. 1976.4. コヒゲシマビロウドコガネ *Gastroserica brevicornis* LEWIS

1♀, 宮城郡宮城町苦地, 22. vii. 1977; 1♀, 加美郡小野田町柳瀬, 4. viii. 1978.

いずれも燈火に飛来したものである。

5. ヒゲトハナムグリ *Amphicoma pectinata* LEWIS

2♂♂, 刈田郡蔵王町遠刈田, 11. vi. 1967; 7♂♂, 同, 7. v. 1977; 18♂♂, 同, 8. vi. 1988; 87♂♂, 1♀, 同, 2. vi. 1978; 12♂♂, 13. vi. 1978.

すでに青森県八戸市などの記録があるが、その産地は極めて局地的で、同一地域でも、ほんのわずか距っても見られなくなる場合が多い。採集品は林内の陽の当る草地を蜂の様に飛び廻っていたもので、ほとんどが♂で、♀はわずか1頭を得たのみである。

6. ツシマムツボシタマムシ *Chrysobothris samurai* OBENBERGER

1♀, 黒川郡大和町赤崩山, 2. vii. 1988.

従来記録は東北地方では、福島県いわき市、原町市、宮城県白石市など阿武隈山地に限られていたが、今回初めて奥羽山系から記録されるものである。現在はこの地が本州における最北の分布地になるが、将来は恐らくより北の奥羽山系や北上山地よりも記録されるであろう。

7. ルリオオキノコムシ *Aulacochilns sibiricus* REITTER

2頭, 桃生郡桃生町深山, 5. vii. 1980. 北上山地の南端部にまで本種の分布が及んでいるとは意外であった。

(仙台市, 渡辺 徳)



○奇妙な形をしたゴミムシダマシ

Cossyphus depressus (FABRICIUS 1781) はインド産の標本に基づいて記載されたゴミムシダマシの1種であるが、写真に示した通り体長14mm内外、大変風変わりな形をしていて、ある種の植物の種子を思わせる。ネパール、インド、ビルマ、中国などに分布し、台湾からも記録があり、オオカメノコゴミムシダマシの和名が与えられている(三輪, 1931)。また加藤正世博士も「台湾」産の標本を図示した(分類原色日本昆虫図鑑, 9. 1933)。しかし、台湾からの記録はいずれも「素木標本」に基づく誤った記録と考えられる。成虫は5~7月と9~11月に出現し、燈火に来ると云う。

筆者の1人、妹尾は1980年5~6月にタイ国北部を訪れた際に本種を採集したので記録する。

2頭, Thaton (near Fang), N. Thailand, 27. v. 1980, 妹尾俊男採集。

いずれも橋に付置されている水銀燈に来たものである。(東京農大, 妹尾俊男・鈴木 互)

=<連絡・報告>=

○昭和56年度より会費値上げ

昭和52年に会費を値上げしてから4年間が経過致しました。その間、本会が順調に活動することができましたことは、ひとえに会員諸兄姉の心からのご支援によるものと感謝致しております。

さて、既にご承知のことと存じますが、本年より印刷費が値上げになり、また来年1月からは郵便料金の値上げも予定されております。そこで、まことに不本意ではありますが、来年度(昭和56年度)からの会費を ¥ 2,000 に値上げすることを、過日の世話人会で申し合せました。会員の皆様には諸情勢ご賢察の上、ご了承下さいますようお願い申し上げます。(世話人一同)

甲虫談話会

会費(一カ年)2000円、次号は1月30日発行予定。

投稿〆切は12月30日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話: 03(364)2311, 振替; 東京0-60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥ 5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥ 1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥ 1,400, 4個以上 ¥ 850 (以下同様), 第二地帯 ¥ 1,400, ¥ 950, 第三地帯 ¥ 1,600, ¥ 1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売します。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25
電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社